

創立100年を迎えた国立科学博物館

橋本光男（国立科学博物館）

東京の上野公園にある国立科学博物館は 昭和52年（1977年）に開館100年を迎えた。明治10年(1877年)同じ上野公園に教育博物館が設置され 主として学校教育に貢献する目的で 教育用品（実験器具など）動植物 金石などを展示 公開したものがはじまりであるとされている。しかし どの機関でもそうなのかも知れないが とくにこの博物館は 100年を経る間に その目的や内容や機能がいちじるしく変転した。そして現在の国立科学博物館は 100年前の教育博物館とはまるで違った性格のものになった。

教育博物館はその名が示す通り もっぱら教育を主目的としたものであり 学術研究の機関とは考えられていなかった。古い資料によると たとえば岩石や鉱物について 収集され展示された標本の中では 鉱石 石材 陶土など殖産・勲業の色彩の濃いものが重きをなしており また他の分野でも 幼稚園までもふくむ学校用器具 標本などが多く含まれていた。これらのことは 当時の理科教育は主目的が啓蒙にあり しかもそれに対して教材が充実 完備していなかったため 博物館にその面での大きな期待が寄せられていたことを物語っている。その反面 ヨーロッパですでに確立された博物館というものが元来持っているべき筈の 学術資料の収集 保管 研究という機能は ほとんど顧みられることがな

かったように思われる。そしてその後も 一時期（明治22～大正3）東京高等師範学校の付属施設となったり さらに関東大震災で建物も資料も事実上潰滅したり 紆余曲折の時代が続いた。

科学博物館が学術研究の機関でもなければならぬという認識が高まったのは 100年の歴史も半ばを過ぎてようやく昭和10年代になってからのことであった。現在の国立科学博物館の本来の歴史は したがってこの時代にはじまったと言うこともできる。

しかし その後も途は決して平坦ではなかった。なかでも太平洋戦争敗戦前後は大変な時期であった。昭和20年 上野公園に駐屯した陸軍対空部隊は 科学博物館と学士院の建物を接収し兵舎にあてた。そして 強制取り壊しの対象となった木造の別館は 職員が展示品を運び出すいとまもなく 軍隊の手によって取り壊されてしまった。また 部隊は標本類を格納してあった木箱を利用するため 多数の標本を添付ラベルもろとも放棄してしまった。このようにしてわが科学博物館は 敵軍の襲撃によらず 自国軍隊の手によって 関東大震災の時に次ぐ再度の潰滅的打撃をうける破目になった。戦後 当時職員であった人々の懸命な努力にもかかわらず 失われた標本の大半は復元できず 今でも数千の標本が台帳にその名称のみをとどめている。科学博物館の最も苦難に充ちたこの時代に職員であった人々の労苦を忘れることはできない。

昭和33年 日本学術会議の「自然史科学研究センター（仮称）の設立について」の要望を受けた政府は 国立科学博物館の拡充整備によってこの要望に応えることとし 昭和37年より 動物 植物 地学の各研究部の増員がはじまり また昭和47年には人類研究室（後に部）も設けられた。地学研究部も当初の研究員4名から現在の14名に拡充された。ここに至って 学術研究機関としての科学博物館という方向がやっと定まった。100年の歴史はこの方向を見出す歴史であったのであろうか。

国立科学博物館には 現在6つの研究部門と2つの付属施設（植物園）がある。そのうち 地学研究部は5

国立科学博物館
100年

図案はフタバズブキリュウの骨核復元図を中心に国立科学博物館の建物に秋のカシオペア星座と北極星を配したもの



つの研究室を含み 動物研究部とならぶ大きな部である。研究室は地学第1 第2 古生物第1 第2 第3と分かれており 地学と名づけられている2つは主として岩石と鉱物の研究に従事し 3つの古生物研究室はそれぞれ古植物 古無脊椎動物および古脊椎動物をとり扱っている。職員は部長1 室長4 主任研究官3 研究官5 補助員1 合計14名。この数は地質調査所を除くわが国の地学関係研究機関としては 少ない方ではないかも知れないが ヨーロッパやアメリカの本格的な自然博物館にくらべるとかなり少なく 博物館が果すべき学術的ならびに社会的役割りという面からみれば さらに拡充される必要がある。研究活動は多岐にわたり その成果は多くの学術誌に発表されつつあるが 博物館としては国立科学博物館研究報告(通巻130号余)および国立科学博物専報(通巻9号)の2つの研究成果発表誌をもっている。昭和51年9月末現在の所蔵標本は 岩石11,482 鉱物25,233 化石229,710であるが 残念ながらこれは決して多いとはいえない。一方 社会教育の面では 年十数回の見学会 講演会等を開催 また特別展示や移動展示にも協力しているが とくに昭和52年11月には この10年来続けられてきた自然分野の全面的展示更新の最後として 地学(地質 鉱物 古生物)の新しい展示が完成した。

なお 開館100年を記念して いろいろな事業が計画実施されたので 主なものを紹介しておきたい。

- 昭和52年11月2日(水)に 天皇陛下を迎えて記念式典が挙行され 13名の功労者が表彰された。地学関係では 鉱物の桜井欽一博士と 彫刻家の今里龍生氏の2人であった。式典に引き続いて祝賀パーティが催された。
- 特別展「国立科学博物館100年の歩み」を開いた(11月2



自然科学と博物館

- 定価1部 500円 (送料200円)
- 年4回発行
- 発行所 東京都台東区上野公園7-20 科学博物館後援会 (03) 822-0111(代)

日~12月4日)

- 国立科学博物館百年史(B5版xiv+898頁 箱入)を編集発刊した。
- 記念特別講演会(講師 江崎玲於奈 高木 昇 鈴木 尚の3氏)を催した。
- 国立科学博物館100年記念切手(50円1種)が発行された。

なお 上記百年史のほかには科学博物館後援会発行の「自然科学と博物館」第44巻 第3号(1977.9.1)に「目で見ると100年史」が特集されている。

新刊紹介

「日本の自然 JAPAN and Its Nature」

待望の独創的な自然科学書ができた。本書は日本の美しい自然を広く海外に知ってもらおうという意図で 同時に出版された「JAPAN and Its Nature」と全く同じ内容の姉妹書だが 日本人自身にとっても その自然と文化を学ぶ格好の書である。日本をとりまく気候・生物分布・地形・地質 そして日本人自身とその文化が いかに大陸と深いつながりを持ち しかもそれが何億年にもわたる長い歴史の過程で少しずつ形づくられてきたかを厳選された写真と図表をつかって 意欲的に

表現している。日本の自然に対する深い愛情と自然に学ぶ謙虚さを示すだけでなく この書は今日の日本の文明や経済活動のあり方についても考えさせる問題を提起している。従来の専門的な自然科学書とは趣を異にした広範な内容の教養書として どの家庭にも一冊おきたい書物である。(小玉喜三郎 記)

- 書名 日本 の 自然 JAPAN and Its Nature
- 監修 湊 正雄 編集 地学団体研究会
- サイズ等 変形版 223P 1977年9月
- 定価 4,800円
- 出版社 平凡社
- 〒102 東京都千代田区四番町4
- ☎ 東京(03) 265-0451(代表)
- 振替 東京8-29639